

第四章

黎明の頃

(平成元年)

52 53 54 ~ 58 59 60 61 62 63 64 ~ 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 ~

- | | | | |
|--------|-------------------------------|------------------|--|
| •春日園開園 | •たんぼぼ作業所管理開始
•天皇陛下より御下賜金拝受 | •第2春日園開園 | •生活ホーム「とびた」設立 |
| | | •生活ホーム「KASUGA」設立 | •生活ホーム「1・2号館」設立 |
| | | •生活支援サービスのぞみ設立 | •つくし/たけのこ作業所運営
•障害者自立支援法へ移行
•のぞみ移転統合 |

授産事業に於いては60年頃からいろいろと作業種目について模索をした頃というイメージがある。そして少しづつ身に付いてきたのが平成元年頃までかと思う。この時期があったからこそ、私たちは授産に対する考えや行動することがこの先でできたと思う。

①1000万円の売り上げ超える

授産事業はこれまでの取り組みにより昭和61年決算において初めて1000万円の大台を超えた。その1/3はダスキンの仕事であった。そして斜陽になりかけていた縫製班もまだ240万円の売り上げがあり、2班で売り上げの半分を占めている状況であった。木工班はオリジナル（パズル）商品の開拓などが主で、機械類を設備し伸びるにはもう少し時間が必要であった。

②非常通報装置の設置で防災対策

63年4月、今では当たり前になってきた消防署へ非常通報装置が春日園に設置された。これは東村山市？にあった老人ホーム松寿園の火災で多くの犠牲を出したことにより、時の厚生省は入寮施設への設置を図ったものである。

電話回線を利用し、ボタンを押せば消防署から登録職員まで通報され、メッセージが流れる。緊迫した状態でしかも人手のない夜間では、職員は火事だと叫んで回るだけで精一杯だろうし、もしかして消防署への通報は出来るのだろうか？目の前の救助が先になるのでは？など考えてしまう。少なくとも通報装置によりボタンを押せば消防署や施設職員にメッセージが届くことはありがたかった。

余談ではあるが、18年に九州の老人グループホームでの火災がきっかけで私達グループホームへのスプリンクラー設置義務として制度化された。事が起こると制度が作られていくのが何とも歯がゆい・・・。

③疥癬集団感染

平成元年11月疥癬菌が見つかった。入寮者の多くが感染し皮膚のかゆみを訴えた。当時の次長（後4代園長榎本千二氏は疥癬撲滅運動」と名付け、看護婦を中心に施設一丸となってこれの対応を図った。先ず薬剤風呂への入浴と罹患者の毎日の入浴、朝夕の薬付け（オイラックス他）、布団の乾燥、下着交換チェック、居室の拭き取り掃除など考え付くことはすべて行ったように思う。

指揮命令とはこのようなケースで發揮するものだと若輩者として感じ入ったように思う。この戦いは約半年間継続されたが、感染経路はついに明らかにすることはなかったが、再びの疥癬騒動は起こっていない。

④三大課題事業の実施

春日園は開設当初からいろんな修理修復に手を焼いてきた。先ず蛇口の詰りがある。たぶん生まれて初めて水道の蛇口を取り外し修理したと思う。中の網目に砂のような小砂利がびっしりついていた。そのような状態が洗面所でおき、しばらくすると風呂場で起きというような建屋のあちこちで起るのだ。そんなことが2〜3年続いたのではないだろうか？

そして、水が濁ってくる。恐らく配管の錆だろうと思うが、防錆の処理を施していない配管が使われたのだろう。当時津田

園長は一升瓶にその水を詰め業者に強く改善を求めたが、抜本的な改善には至らなかった。

そのような配管だったので、5年を経過したあたりから漏水が始まり居室や玄関の床を掘ったり、聴診器のようなもので漏水個所の音を探ったりいつも悩まされ続けた記憶がある。

極めつけは污水管の詰りである。広場の污水枡からティッシュだの吹き出てくる始末で、柔らかな塩ビ管を煙突掃除のように污水管に突っ込むなどして貫通させたりもした。原因は大抵の場合配管内に石が詰っていたのだ。また汚水池を掘り或は汚泥のかい出しも行った。

これらのことは設備業者の職人が故意に砂や石を含ませていたとは思えない。業者名は熊谷市の(株)ヤマヤ、確か20年以上も前に倒産したと聞いているが、若い職員には大分苦勞させてしまった。業者によっては素人をごまかすような工事もうものだということを教えられた。

このように過去の設備関係での不具合があったため、以後特に給水管を全面改修したり、冷暖房設備等の交換工事を行ったりと遠回りしたが、現在は老朽化などでの対応が必要となつてきている。

これらの過去から、榎本氏は当面の春日園の大きな課題を3大事業として取り組もうと御旗を立てた。課題を職員と共有し合うことが大切と考えての宣言であったと思う。わかり易く、明確であり、誰も納得した事業であった。施設設備の老朽化や不備からこの時に力を合わせてやることが将来にとって大切との英断であった。また、このことを通しそれ以後の整備計画や行事などに対する冒険も勇気を持って行えるようになっていくようになったと考えると考えられる。

ア、大屋根の雨漏り防止事業

春日園の屋根は陸屋根式アスファルト防水だった。今にして思えば工法の失敗ではないかと思えてならないが、屋上アスファルト部に亀裂や盛り上がり部が出来てしまいそこから雨水が侵入してしまっていた。

当時大雨が降ると雨漏りがするようになったのは築10年経たないうちだったかと思うが、合棟した部分や作業棟などからの雨漏れは床面が濡れるだけでなく、作業材料なども濡らしてしまい気分もとても減入ってしまった。このままの状態では天井はおろか壁などの建物全体の傷みを招いてしまうとのことから、屋根をどのように治すか検討した結果すっかり大屋根で覆ってしまおうということになった。完成は平成3年12月15、019千円の総事業費(補助金約1,100万円)だった。

イ、スプリンクラーの設置事業

入寮施設にとって特に夜間火災は怖いものだと感じていた。宿直が1名体制で果たして緊急時にはどのような対応がとれるのか、しかし夜間職員を過配するだけの余裕はない。いざというときの一抹の不安を持たぬ者は無かったのではないか。

前述の松寿園の火災により、入寮施設にはスプリンクラー設置の為の補助金制度がつけられ、是非この機会に当園も設備



しようとなった。只従来型の水による消火栓にするのか、或いは新しく認められた粉末式（消火器タイプ）にするのかという選択があったが、本園では廉価で工事しやすい粉末式のスプリンクラーを配備することとした。完成は平成4年3月、総事業費45,865千円（補助金17,499千円）程だった。スプリンクラーに甘えるわけではないが、宿直者の不安はぐっと少なくなったように思う。

ウ、第2春日園の設置

開設当初から通所者は春日園への併設という形で平均5〜6名の利用状況だった。でも彼らの為の更衣室は無く、送迎も行っていなかった。「居る場所」は大切だと考える、その場所を作ってやらない限り通所者はいつまでたってもお客になってしま

う。また、地域には授産施設に入所したいという希望者があり、制度的にも身障・知的障害の相互利用が認められるようになったので、第2春日園の建設を計画していくこととした。

土地の取得からだったで資金的には3大課題事業と一緒の動きで大変苦労したように思うが、事が成就した折、私達職員にとって大きな仕事をしたという達成感にみたされた。

土地代15,530千円

第2春日園建物総額60,142千円

（補助金41,620千円）



▲第2春日園地鎮祭



⑤資金集めにテレホンカードの販売と善意銀行の実施

三大課題事業には前述の如く資金が必要だった。資金に余裕のない法人にとって幾らかでも資金を捻出しなければならないと苦戦した。

ア、テレホンカードの発売

当時は携帯電話のない時代で公衆電話が主流だった。プレミアムの付いたお宝カードなどもあったが、本園は500円分のカードを2枚1組2000円で資金集めのため販売した。図柄は畠山重忠公像と山崎和子女史の埼玉のぞみの園パンフ挿絵だった。売るといふことは販売ネットを持たない施設にとっても大きな難問であり、利用者には日常生活用品に組み入れてもらったりと売るのに大変困った記憶がある。

イ、善意銀行の設置

銀行といっても施設で金融業をやるわけではなく、この趣旨に賛同いただける方から1口150万円を3年間お預かりし、その預金利息をご寄付いただく仕組みであった。当時の定期預金利息は若干下降気味だったが、それでも3.5%程度は付いたと記憶している。保護者・協力者から総額2000万円以上の出資をいただき3年間で200万円以上の利息がついたと思う。

善意銀行にご理解とご協力いただいた皆さんには本当にありがとうございました。利息は全て事業に当てさせていただきます。